

岡田 潔

我が心の博多、
そして西鉄ライオンズ



岡田 潔

我が心の博多、そして西鉄ライオンズ

海鳥社

我が心の博多、そして西鉄ライオンズ◎目次

純情編
博多

キネマのトモチちゃん	8
川端ぜんざい	17
旧博多駅前物語	27
ガラの広っぱ	36
キネマの攪乱	45
球友	54
能古島のコスモス	64
夢は夜ひらく	73
屋台	82
平和台への坂道	92

北九州エレジー……………101

東中洲……………110

激情編
ライオンズ

指定席……………124

球場は劇場……………139

宝劇場……………155

末広長屋……………168

さらば、博多……………184

あとがき
205

キネマのトモちゃん

玄界灘から吹きつける潮風に乗って、この街は特有の香りを醸し出す。潮の香りと、娼婦の白粉の匂いが微妙に入り混じる昭和三十三年の早朝、ボクはこの街を駆け抜けていた。

「お前、観たや、裕ちゃんの映画……」

「『俺は待ってるぜ』やろ」

「それは去年やろ……オイラはドラマー、ヤクザなドラマー、『嵐を呼ぶ男』たい！」

新聞配達仲間のトモちゃんが、自慢気にボクに映画の話を持ちかける。

この街には、遊廓と映画館がある。トモちゃんは大の映画好きで、「大浜劇場」の常連である。小学校を卒業して、中学校にも行かずに働いていた。朝の新聞配達を終えると、遊廓に住んでいるお姐さんたちの使い走りをして生計を立てている。大浜劇場に入りびたれるのは、どうやらお姐さんから頂ける招待券のおかげである。

「お前に券あげるけん、裕ちゃんば観とけ。オレも裕ちゃんみたいになるけん」

「トモちゃん、裕次郎のごと足が長うなかばい」



「バカタレが、裕ちゃんみたいなスターになるて、言いよるったい」

足が極端に短いトモちゃんが、裕次郎みたいにスクリーンに登場するなんて……。ボクのできる限りの想像力を駆使しても、到底考えられることではなかった。でも、この大浜劇場の椅子に一日座っているだけで、誰しもがスターを夢見ることができた時代であった。昼間は遊廓のお姐さんたち、夜は仕事を終えてのお客さんたちで、大浜劇場は常に大入り満員の映画館であった。

博多港の近くである大浜町は、昔から船員、行商人の往来する街である。そんな人たちの安息の場として、遊廓と映画館ができたのも十分納得できる。トモちゃんが、この街に住みついて四年になるといふ。トモちゃんの実家は佐賀、農業をやっているらしい。

「オレな、百姓だけにはなりとうな。朝から晩まで、何で、あげん働かないかんとかいな……」

トモちゃんは、ことあるごとに、百姓を軽蔑している。そんなトモちゃんが、ある日之境に百姓の悪口を言わなくなったのである。大浜劇場で上映された、今井正監督の『米』を観てからである。

「裕ちゃんもよかばってん、江原真二郎もよか……」

トモちゃんの学校は大浜劇場である。裕ちゃんや東映オールスター映画の次郎長ものの

話しかしなかったトモちゃんが、何だか、社会に目を向け、理屈っぽい話をするようになったのも、このころからである。

「灯台で働いている人はエラカ。お前も人の役に立つ人間にならないかんど」

何のことはない、先週やっていた木下恵介監督の『喜びも悲しみも幾歳月』に早速影響を受けていたのである。

トモちゃんの、もう一つの学校は遊廓であった。ボクが新聞配達をしている地域は、大浜の遊廓街であった。朝の遊廓街は、夜の宴の余韻を残した静けさがあった。この街の一角を配達する時に高揚する気分は一種独特のものがあつた。

「ごくろうさん。トモちゃんの友だちやろ」

「ハイ」

「トモちゃんに言うとなつて、最近うちのここに来んけん、心配しとるけん」

最後の配達が終わつて店に帰る時、二階の欄干からひょいと顔を出し、綺麗なお姐さんが声を掛けてきた。

「言っときます」

「頼んだヨ」

化粧の匂いのするチリ紙に十円玉を包んで、欄干から駄賃を放り投げた。

店に戻って早速、トモちゃんにこのお姐さんのことを話すと、

「お前、あの姐ちゃんは気をつけた方がいいぞ。あの姐ちゃんな、背中に刺青しとるとぞ。刺青しとる女は、ヤクザの女たい」

「女も刺青しよう？」

「せんせん。あの姐ちゃんだけたい。あの姐ちゃんとボボしたら、病気になるけん、注意した方がいいって……大浜劇場の源さんも言いよったたい……」

源さんは大浜劇場のモギリのオッサンである。四十ぐらいで、頭が禿げあがった助平そ
うなオッサンである。大浜劇場の非番の時は、中洲のピンク映画に通い、遊廓で遊ぶ独り
者である。

「あの綺麗か姐さんが？」

「お前は、女ば知らんけん、分からんたい。オレは大浜の姐さんば、たくさん知つとる
けん、分かるぞぞ」

十一歳のボクには、分かるはずがない。トモちゃんは遊廓に働くお姐さんたちの買い物
をしたり、身体をマッサージしてやったりで、彼女たちの身辺は、かなり詳しいらしい。

十五歳にしては大人びて見えるのは当然のことである。

あとがき

平成二十三年三月十一日を境に、国の在り方、人の生き方を含め、人間の根源的なものを突きつけられたような気がする。世の中は利便性を追求するあまり、大切な心の風景を失った。荒廃した風景に蝕まれた心身からは、何も生まれてはこない。

ボクが少年時代を過ごした昭和三十年代前後は、貧しくても、街のあちこちに心を満たしてくれる人、風景が存在していた。そこからいろんなものを学び、人としての骨格を形成してくれた気がする。

この本に登場する人物は皆、活きいきとした体温を蓄えている。その体温を感じながらボクもまた、夢とロマンと冒険心という三種の神器を手に入れた。

この困難な時代を乗り越えるキーワードは、やはり人の心の在り方であり、他人を思いやる体温の温かさであると思う。

以前、スペインのアンダルシア地方サロブレニャに暮らし、そのあまりにも人間的な

営みに共感し、『変わるな！スペイン』という本を出版した。今この状況の中、「変われ！ニッポン」とメッセージを込めて今回の出版に至った。

最後に、このエッセイを連載してくれた福岡健二さん、福岡恵子さん、三年前に亡くなった中村信昭さんに感謝したい。また、いろんなアドバイスをくれた長年の友人・谷関史夫君ありがとう。もちろん、今回出版をして頂いた海鳥社の西俊明社長、編集の田島卓さん、本当にありがとうございました。

平成二十四年一月

岡田 潔

岡田 潔（おかだ・きよし）

1946年、博多生まれ。福岡工業高校、明治大学卒業後、演劇群「走狗」にて演劇活動。その後10年間、世界を放浪。スペインに魅せられ3年間居住。帰国後、演劇企画制作会社トム・プロジェクトを立ち上げ、17年間に65本の創作劇をプロデュースし日本・世界各地で公演。2008年度には、第43回紀伊國屋演劇賞団体賞を受賞。著書に『変わるな！ スペイン』（雀社、1991年）。趣味は、人間観察、ジャズなど多数。極真空手の黒帯でもある。

本書は、福岡健二・福岡恵子氏発行「ジライヤ」及び中村信昭氏発行「鶯」に掲載された文章を編集し、加筆・訂正したものである。また、挿画はすべて著者本人による。

わ　こころ　はかた　にしてつ
我が心の博多，そして西鉄ライオンズ

■

2012年2月1日　第1刷発行

■

著　者　岡田　潔

発行者　西　俊明

発行所　有限会社海鳥社

〒810-0072　福岡市中央区長浜3丁目1番16号

電話092(771)0132　FAX092(771)2546

印刷・製本　有限会社九州コンピュータ印刷

ISBN978-4-87415-843-2

<http://www.kaichosha-f.co.jp>

[定価は表紙カバーに表示]